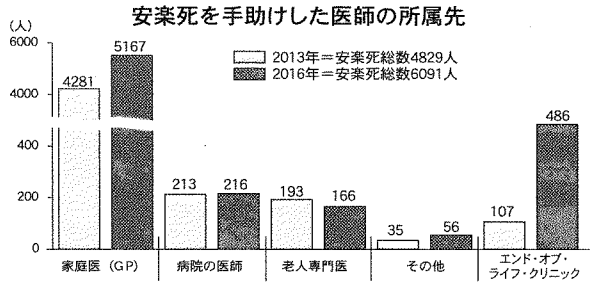


# 病院死が最も少ない国 オランダ視察レポート

## Part 5 安楽死を受ける医師団

オランダで安楽死が法制化されて16年たつ。この間に安楽死を選ぶ人は着実に増えている。

4人のうち3人は末期がんで、神経性障害、心疾患、



呼吸障害の人たちが続く。その手続きは、長年診察を受けている家庭医（ホームドクター、GP）に相談し了解を得て、次に、全く付き合いのないもう一人の医師（スケン医師）からも認められねばならない。死に方の9割以上は医師による致死薬の注射である。ジュースやワインに医師から渡された致死薬を入れて飲む、自殺幫助で亡くなる人は1割もない。両者を合わせることもある。

誰が手助けしてくれるかという点、家庭医が最多で85〜90%。そのほか、病院の専門医や老人病の専門医などだが、この数年急激に増えているのが「エンド・オブ・ライフ・クリニック」という医師団体である。2013年の安楽死者は4829人で、そのうち同クリニックによる人は107人。わずか2.2%だった。それが2016年になると、全安楽死者は6091人に増え、そのうち同クリニックによる人は486人、実に8%に達する。

## 家庭医に次ぐ支援者に

同クリニックについては、2014年6月の前回の視察の時に、アムステルダムで説明を受けた。「かかりつけの家庭医の中には、安楽死に反対の方もいますから安楽死を望むのに医師から断られることもあります。その方たちのために安楽死を引き受ける医師たちの集まりです」

2012年3月に発足し、本部はデンハーグにある。各地の医師20人が登録しているという。法律で認められたとはいえ、カソリック信者などさまざまな理由で安楽死を手助けしたくない医師は少なからずいる。だから、この医師団が関わる安楽死は「増えていくでしょう」と安楽死協会は予測していたが、本当にその通りとなっている。

「当初はこの医師団の存在を認めたくなかったが、今では必要だと思っていいます。多くの家庭医から安楽死を受けたいという声がある。オランダの安楽死の歩みは、1971年に重い障害を負う母親を安楽死させた女医、ポストマさんの逮捕事件から始まったと言われている。以来、論争は絶えないが、同医師団の活動が広がり、誰でも安楽死法を享受できるようになったことは確かだ。



▲医師のインゲンさん



▲医師のスモークさん

は否定していたが、今は評価している」と語る。

オランダの安楽死の歩みは、1971年に重い障害を負う母親を安楽死させた女医、ポストマさんの逮捕事件から始まったと言われている。以来、論争は絶えないが、同医師団の活動が広がり、誰でも安楽死法を享受できるようになったことは確かだ。



ジャーナリスト 西田 直人  
元日本経済新聞編集委員  
元日経リサーチ社長  
元日経リサーチ編集委員

1971年、慶応義塾大学経済学部卒業後に、日本経済新聞社に入社。流通企業、サービス産業、ファッションビルなどがある。